

各報道機関担当記者 殿

知識が母を救う!?

自閉スペクトラム症の子を持つ母親の気持ちの変化 —発達障害の知識が母親の感情に与える影響—

研究成果のポイント

1. 世界で初めて、就学前後の自閉スペクトラム症児（※）を持つ母親の子どもに対する感情の変化を後方視的に調査しました。その結果、診断を受ける前の1歳半、3歳の時点ですでに健常児を持つ母親よりも高いストレスと心理的苦痛を抱えていることを明らかにしました。
2. また、自閉スペクトラム症児の母親は診断時点で発達障害に関する知識が高いほど、診断時点を含む幼少期において、子どもに対するネガティブな感情が低下していることを発見しました。

成果概要

大阪大学大学院連合小児発達学研究科金沢校の大学院生富山更、金沢大学医薬保健研究域医学系の三邊義雄教授、金沢大学子どものこころの発達研究センターの菊知充教授らの研究グループは、自閉スペクトラム症児を持つ母親を対象にインタビューと質問紙調査を行い、幼少期における母親の感情の変化を数値化し、発達障害に関する知識が高いほど診断時のネガティブな感情が低下することを実証することに成功しました。

これまで、自閉スペクトラム症児の母親は、ストレスが高いことは言われてきましたが、出生時からの母親の感情変化は具体的には明らかにされていませんでした。また、自閉スペクトラム症児の母親の心理的苦痛の保護要因としてソーシャルサポートは良く知られていますが、発達障害に関する知識の影響について調べたものはほとんどありませんでした。

本研究グループは、第一に、5～8歳の言語発達に遅れのない高機能の自閉スペクトラム症児の母親30名を対象に、子どもに対する感情の経時的変化を出生時から調査時（5～8歳）まで後方視的に調査し、健常児の母親32名と比較しました。その結果、自閉スペクトラム症児の母親は医療機関で診断を受ける前からすでに健常児の母親と比べて高いストレスと心理的苦痛を抱えていることが明らかとなりました。

第二に、自閉スペクトラム症児の母親のみに焦点を絞り、診断に関連するイベント毎の時点（出生時、発達の問題に気付いた時点、診断を受けた時点、調査時点）における子どもに対する感情を調べたところ、発達障害に関する知識が高いほど、子どもに対するネガティブな感情を持ちにくいことが明らかとなりました。特に診断時点での子どもに対するネガティブな感情が緩和される可能性が示されました。

今後さらに発達障害の知識を普及することが健やかな親子の関係を築く上で重要であることを示した本研究の成果はきわめて画期的です。

本研究成果は、2018年8月2日（木）午後2時（米国東部標準時間）に米国科学雑誌『PLOS ONE』のオンライン版に掲載されました。

【研究の背景】

養育者とその子どもとの社会的相互作用は、幼児期の発達において重要な役割を果たします。したがって、母親の子供に対する気持ちは、子どもの社会的な心の発達にとって非常に重要です。自閉スペクトラム症の子供を持つ母親は、幼少期の育児において高いストレスと心理的苦痛を経験することが知られています。近年、自閉スペクトラム症児の早期介入の効果が実証され、介入方法や診断ツールが開発されていますが、母親は子どもの診断に伴い複雑な感情を抱くため、医療従事者はそれを十分に考慮する必要があります。

しかし、自閉スペクトラム症児を育てる母親の感情の変化についてはこれまであまり研究されていませんでした。本研究の重要な点は、出生時からの母親の感情の時間経過を捉えることができたことです。また、自閉スペクトラム症児の母親の心理的苦痛に保護的に働くと考えられている要因である発達障害に関する知識、ソーシャルサポート、家族資源と母親の感情との関連について検証しました。

自閉スペクトラム症に対する理解を深め、良好な親子関係を築くための支援を進めることは、医療や教育・福祉にとって最重要課題の一つといえます。

【研究成果の概要】

5～8歳の言葉の発達に遅れのない高機能自閉スペクトラム症児の母親30名を対象に、子どもに対する感情の経時的変化を出生時から調査時まで後方視的に調査しました。母親の感情の経時的変化は、出生時、1歳半、3歳児、調査時点での子どもへの感情をネガティブからポジティブまで20マスの方眼用紙の線上に点をつけてもらい数値化しました。対照群として健常児の母親32名にも同調査を行い、比較しました。

その結果、言語発達に遅れのない高機能自閉スペクトラム症児の母親は、健常児の母親より1歳半と3歳児の時点で顕著に子どもに対するポジティブな感情の低下がみられました（図1）。自閉スペクトラム症児の診断時月齢は平均4歳7ヶ月であることから、医療機関で診断を受ける前の1歳半、3歳の時点ですでにポジティブな感情が顕著に低下していることが示されました。診断を受ける前から自閉スペクトラム症児の母親は高いストレスと心理的苦痛を抱えていることが明らかとなりました。

また、自閉スペクトラム症児の母親のみに焦点を絞り、診断に関連するイベント毎の時点（出生時、発達の問題に気づいた時点、診断を受けた時点、調査時点）における子どもに対する感情を数値化しました。自閉スペクトラム症児の母親の心理的苦痛に保護的に働くと考えられている要因（発達障害に関する知識、ソーシャルサポート、家族資源）と母親の感情変化との関連を調べました。その結果、3つの要因のうち、発達障害に関する知識が高いほど、子どもに対するネガティブな感情を持ちにくいことが明らかとなりました。特に診断時点での子どもに対するネガティブな感情が緩和される可能性が示されました（図2）。

【研究成果の意義・今後の展開】

本研究成果から、自閉スペクトラム症児の母親は、医療機関における診断前から高いストレスが蓄積されており、早期介入は子どものみならず親を含む包括的な支援が必要であることが示されました。さらに、母親が事前に発達障害に関する知識を深めることは、診断時期を含み幼少期の子育てにおいて、母親の心理的苦痛を緩和している可能性が示唆されました。

今後さらに発達障害に関する知識を普及することが健やかな親子の関係を築く上で重要です。

*この研究は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の研究成果展開事業「センター・オブ・イノベーション（COI）プログラム」、科学研究費特別推進研究(24000012)、基盤研究（C）（16K10247）による支援の下、大学院生の富山更、金沢大学医薬保健研究域医学系の三邊義雄教授、子どものこころの発達研究センターの菊知充教授らが共同で行った研究の成果です。

【掲載論文】

〈雑誌名〉：PLOS ONE

〈論文名〉：Changes in maternal feelings for children with autism spectrum disorder after childbirth: the impact of knowledge about the disorder
(自閉スペクトラム症の子どもをもつ母親の心理変化—知識の自信度が母親の感情変化に与える影響—)

〈著者〉：Sarah Tomiyama, Yoshio Minabe, Mitsuru Kikuchi
(富山更^{1, 2}, 三邊義雄³, 菊知充²他)

所属：1. 大阪大学大学院 連合小児発達学研究科 金沢校
2. 金沢大学 子どもこころの発達研究センター
3. 金沢大学 医薬保健研究域医学系

〈掲載日時〉：2018年8月2日（木）午後2時（米国東部標準時間）

【用語解説】

※ 自閉スペクトラム症

対人関係の障害、コミュニケーションの障害、限局した興味・活動の3つの特徴を持つ脳の発達障害。

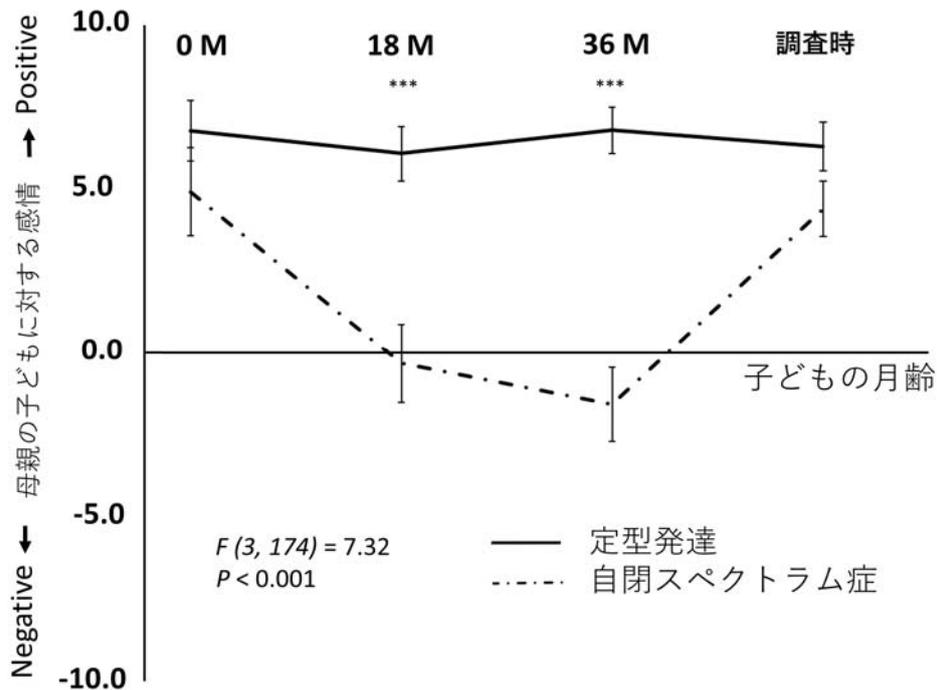


図1. 母親の子どもに対する感情の変化

【図の解説】

母親の子どもに対する感情の変化を表す図で、出生時、1歳半、3歳時点、調査時点での定型発達群と自閉スペクトラム症群の違いを示しています。特に1歳半と3歳時点で自閉スペクトラム症児の母親の感情が顕著に低下していることが明らかとなりました。

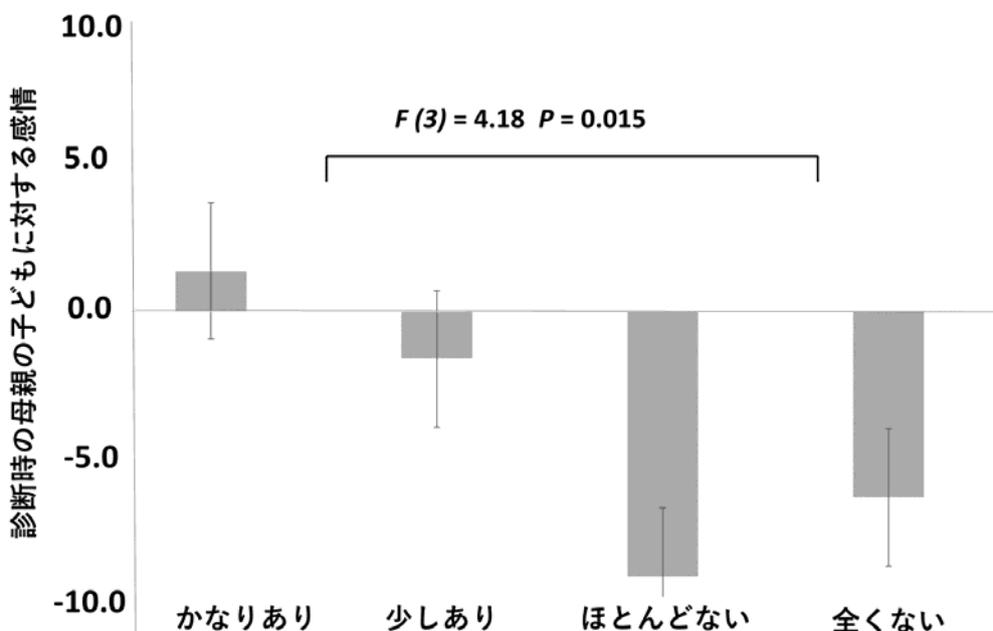


図2. 診断時点における母親の子どもに対する感情の変化と知識との関連

【図の解説】

診断時における母親の子どもへの感情を発達障害に関する知識の程度（かなりあり，少しあり，ほとんどない，全くない）の4段階に分けて示してあります。診断時点で知識があった母親は知識がなかった母親よりもネガティブな感情を持ちにくいことが明らかとなりました。

【お問い合わせ先】

[研究内容に関すること]

大阪大学大学院連合小児発達学研究所金沢校 大学院生

富山 更（とみやま さら）

Tel : 076-265-2856

E-mail : tomisarah@hotmail.com

[広報担当]

金沢大学総務部広報室広報係

嘉信 由紀（かしん ゆき）

Tel : 076-264-5024

E-mail : koho@adm.kanazawa-u.ac.jp

金沢大学医薬保健系事務部総務課総務係

上山 聡子（うえやま さとこ）

Tel : 076-265-2109

E-mail : t-isomu@adm.kanazawa-u.ac.jp